

# 二輪車の初心運転者教習では 教習生とのコミュニケーションが重要

荒川基之 鈴鹿サーキットモーターサイクルスクール 係長

1965年生まれ。1989年3月、日本大学文理学部社会学科卒業。同年4月、(株)鈴鹿サーキットランド入社。同年7月、交通教育課配属。安全運転講習会、各種スクールにてインストラクターを務め現在教習指導員・技能検定員として業務に携わる。

## OPINION

私はこう考える



荒川さんは7月に、5年振りに開催された(社)自動車技術会のシンポジウムで、二輪車の初心運転者への教育効果をテーマにした「ペーパーライダー」における効果的な教育手法を発表した。内容は、自動二輪免許教習の指導員、安全運転講習・各種スクールのインストラクターとしての長年の経験を踏まえたもので、現在業務として重視しているのが自動二輪免許取得しようとする教習生の特性の理解である。四輪免許がどちらかといえば、仕事や日常生活で必要とする移動手段としてのクルマの利便性を享受するために取得するのに対し、自動二輪免許ではバイクに乗ることによって得られる楽しさを求める趣味的要素が強くなるととらえている。問題は趣味的要素が個人の価値観によって形成されるために、バイクに乗ることの「価値」を価値を見出す人が人によって違い、価値が多様化し、細分化されることだといふ。

「ツーリングに行きたいからという理由で教習所に通っている方に、もっとよく話を聞いてみると、単独で走るソロツーリングがしたい方もいれば、友人や同僚とのマストツーリングに行きたい方もいます。さらには家族でのツーリングが目的という方もあります。また、ソロでも、オフロードに挑戦したいのか、バイクのスポーツ性やスピード感を実感したいのか、それぞれニーズが異なるはずで、その一方でなんとなく免許を取りたいとか、バイクに乗って何をしようとしているのか、どんな走りをしていこうかといったイメージや目的を持っていない方もいます。」

こうした免許取得のニーズが明快な人とそうでない人、モチベーション(動機付け)が高いか低いかに加え、原付の運転経験、バイクについての予備知識を持っているか、四輪免許はAT限定かなど、教習生のタイプ・特徴を教習の早い段階で把握できるかどうかで、その後の教習の進捗に大きな差を生むことになる。場合によっては、この差は教習生のモチベーションが低下して、途中で免許取得をあきらめてしまう要因にもなる。たとえば自動車免許がAT限定でクラッチの役割がわからない方、原付に乗ったことのない方などが、最初の時点でバイクの取り回しで勝手が違い、自分が思っていたイメージよりも難しいと感じると、学ぶ意欲を失ってしまうことがあります。また、指導員の不用意な言葉で傷つくこともあります。この段階でモチベーションの低下に気づいて、対処しないと教習目標の達成に大きな影響を及ぼすのです。苦勞して免許を取っても、バイクに乗らないという方も出てきます。早い段階で教習生の特性の把握に、荒川さんが最も力をかけるのが「教習生とのコミュニケーション」である。

### 積極的に話しかけて 教習生一人ひとりの 特徴を把握

二輪教習では、四輪と違って運転中のコミュニケーションが取れないため、休憩中など、教習生が緊張から開放されている時間に積極的に話しかけていくことになる。これに加えて荒川さんは、シミュレーターを使う教習でのディスプレイの機会を活用しているといふ。

「コミュニケーションでは、教習生の動機を知ること、つまり免許取得の目的は何か、どのように乗りたいたいのか、そのイメージを知ることが重要です。こちらから、バイクに乗る楽しさを話すこともあります。ただし、あまり話しかけると、嫌がる方もいます。コミュニケーションを取るときは、逆にモチベーションを下げることもあります。その兼ね合いが難しい。コミュニケーションが取れなくなる、教習が一方通行になってしまう、教育効果が薄れるだけでなく、教習中の安全確保、事故防止に支障をきたすことにもなります。」

二輪教習の目的は、バイク本来の楽しさを学ぶとともに、二輪の特性と車両をコントロールするための基本を習得し、危険性を確実に認識することにある。「教習生はこのことを押し付けてなく、自分で納得していかないと身につかないと思います。だからコミュニケーションが重要であり、指導員が情熱と信念をもって教習生に接することが大事なのです。荒川さんは今後の二輪免許取得教習は既存の『学校的な指導』から、教習生のニーズを探り、それに応え安全運転者を育てていく『接客的指導』が大きくなることを考えている。

## HOW TO LEAD

効果的な安全手法を学ぶ

児童の意見を聞く大西教諭



テープを聞いて、思い浮かべた道路の絵を黒板に描いていく

## 児童が自ら考え、意見を出し合える授業

### テンポ良く 飽きさせない授業

河芸町立千里ヶ丘小学校の正門は比較的交通量の多い坂道に面しており、坂を下るクルマのスピードは速い。このような環境の中で、同校に赴任したばかりの大西健教諭は児童を一人も交通事故に遭わせたくないと、という思いから、交通安全教育プログラム「あやとりい」を使用した授業を自分のクラスで行った。

### REPORT

### 導入は児童が興味を 引くよう、体を動かして

午後12時50分、4年2組で「あやとりい」を使用した交通安全教育の第一回目の授業が始まった。今日のテーマは「こうさてんいろいろ」。まず、黒板に「三つのコーナー」と書かれた教室内に「ある、時々ある、ない」の三つのコーナーが設けられた。狙いとして、子どもたちの交通安全に対する意識がどこまであるのか知りたいためである。信号が黄色になった時青信号が点滅している時に横断歩道を渡ったことは?、横断歩道ではない所を渡ったことは?、大人が交通ルールを守っていないのを見たことは?、質問毎に児童たちはそれぞれのコーナーに移動。「ある、時々ある」のコーナーの子に「どうしてそうしたん?」と問いかける。少し口ももる子、声が小さい子を「みんな聞きたいって、ほら」と励ます。「言ってもいいですか?」と発表する子が言つと、全員がはい、どうぞ」と答える。少し自信なさげだった子も、発表を続ける。



写真上/危険な場所に付せんを貼る  
写真下/「あやとりい」に取り組む

### HINT 一人ひとりの意見を 大切に、全員で考える

次にテープを聞く。「キーキー」クルマの急ブレーキの音が教室に響く。「思ったこと、感じたことを書いてもらえん。4年生だから4つ書いてもらえん。児童たちをしばらく見てまわり「うまく言葉で書けんかったら、絵で描いてもらえん。児童の手が止まる頃に「はい、言いたい人。次々と手が挙がる。指名はせず、全員が立って順番に発表していく。「急カーブを走っているクルマ」子どもが飛び出して急ブレーキ一通り発表が終わると、さっき聞いた音が発生した道路の形を黒板に描いてもらえん。黒板にいくつもの道路の絵が並んだ。大西教諭が「こんな道路あるかな? どう?」と問うと「ある」とあちこちから声があがる。「テープの音はクルマの急ブレーキと思った人多いみたいやね。急ブレーキを体験したことがある人?」かなりの数の手が挙がる。「交通事故は?」3人の手が挙がった。「ちよつと出てきて、どこで?いつ遭った?」と言うとクラス中が教室中央のスペースに集まる。「みんなが危ないな」と思つたところ教えて」と付せんを一人ひとりに渡すと、子どもたちは真剣にスペースに置かれた校区の地図を見て、思い出している。

全員貼り終えたところで「交差点を指して、「ここ」と聞くと皆がうなずく。「この字の中に他に交差点はないかな?」では「あやとりい」を出して、交差点だと思つ所にマルを付けて出してください。信号のある大きな交差点にマルを付ける児童が多い。午後2時。全員が「あやとりい」のワークシートを提出して授業終了。



8の字状に机が並び教室

### ベーシック・データ

目的  
児童を交通事故に遭わせたくない「あやとりい」を使用した授業を開始。取材した「こうさてんいろいろ」のワークシートにはさまざまな交差点のある街の絵が描かれており、交差点のしくみ、種類や危険性を理解することがねらい。交通安全教育の導入であると同時に、夏休みに「自分たちのまわりでどんな交差点があるか」を親子で調べるための導入の授業でもある。

実施日(取材日)  
2005年7月13日(水) 12:50~14:00

受講生数  
27人(4年2組)

使用教材  
「あやとりい」の「4 こうさてんいろいろ」